

高野●経塚朋子

カーブにてレール軋ます高野線学文路駅にてしばし停車す
トンネルをぬければ秋暮 下古沢に降りる青年スマホを灯す

闇の山のぼる奥の院ゆきバスの乗客四人さいごは一人

千手院橋「数珠屋四郎兵衛」灯りみてひとのかげなし夜の風とほる

大広間白壁に向きひとりたうぶ精進料理まづ胡麻豆腐

足をつかみひきこまむとする冥き水 布団を壁に寄せ眠りたり

両の手をすりあはせよと若き僧わが左手に塗香を置きぬ

子の知らざりし句のひとつ てのひらを膝にひらきて塗香にほはす

勤行のこゑひくく和し灯明のひとつ激しくゆるる朝冷え

わが問ひにわが名をよびて答へたり木蘭色の法衣のこゑ

仏舍利は米粒ほどとぞパタンより来りて拡大鏡にかがやく

朝鳥のこゑにみあげる千年の杉の木末が朝日に融ける

奥之院弘法大師御廟にて人と離れて蠟燭灯す

中の橋にたばね売らるる高野槇つやめくほそ葉の風の傷あと

目をふせて母はよりそふ子を見をり宝来飾紙の白ねずみ

なき子の部屋なき父の部屋母の部屋 日にちあしたのひかりを入れる

二百五十日供へつづけたる高野槇ひとつつ葉を落とし瘦せたり

風吹けば手首に纏ける金剛線五色の紐が守りくるとぞ

あれはなに 芽吹きはじめた菖蒲田をゆるる翼の赤煉瓦色

おかげさまで生きております。お大師さま宛の葉書の青葉のひかり



受賞の言葉——経塚朋子

人生、何が起るかわかりません。突然の子の死は耐えがたく、今も信じ難く。まさか子の挽歌を作ることになろうとは。そしてその挽歌で心の花賞を受賞させていただくとは。「高野」は多くの方に背中を押していただいて成った作品です。亡き子、夫は勿論のこと、高野山普賢院をお教え下さいました晋樹隆彦さん、夕闇の高野に送り出して下さった西川和榮さんをはじめ堺歌会の皆さん、連作を作る機会を下さった秋葉原歌会の倉石理恵さん、初めての読者としてご批評下さった会の皆さん、どうも有難うございます。そして酷暑の中、読み込んで下さいました先生をはじめ選考委員の皆様、選者の皆様、心より御礼申し上げます。